

随筆・王ツセイ

滝沢村助役心象スケッチ

まえがき

この心象スケッチは、私が県職員時代に岩手県滝沢村(現滝沢市)に派遣されて村の助役を勤めた1992年(平成4年)4月から1995年(平成7年)3月までの3年間のうち、初年度の前半の印象を書き留めた形となっている。

いつ書いたかといえ、県に戻って暫くした1998年(平成10年)に私が教育次長をしていた頃と思われる。その助役時代を含めて当時は毎日日記を付けており、それを基にゆっくりしたペースで書き起こしたと記憶する。残念ながら途中で止まっているが、内容的には今読み起こしても新鮮かつコミカルで自分の作品にしては良い方と感じる。

本書に厚みを付け、楽しい要素を膨らませるため今回掲載した。自分にとっては涙が出るほど懐かしく、まばゆい作品である。改めて当時の滝沢村の皆さんに心から感謝を申し上げつつ……。

♡ 1 晴天の霹靂

平成4年3月6日(金)の午後のこと。人事課のI課長補佐から同課分室に来てほしい旨の電話があった。当時私も環境保健部の人事担当であったから、こういう電話はごくあたりまえのことではあった。



この話を受けた当時の私

しかし、なにも資料はいらないという。何かまずいことでもあったのかなという気がした。

部屋についてみると、直ちに総務部長室に案内された。いよいよもって変だなと思っていると、U次長に椅子をすすめられた。U次長は一言二言の雑談の後、切り出した。「あなたに大きな仕事をやってほしい。」ははー、何か丸秘のことでもやってほしいのかな。「滝沢村の助役に行ってほしい。」…しばし無音…大変なことがこんなに簡単に決まってしまうののだろうか。

一方では遂に來たかという思い(私は市町村担当課の課長補佐を経験している。)がよぎる。暫くして「有り難うございます。」と返答する。運命の一瞬であった。

♠ 2 お見合い

その人は、こちらの席まで来て、にっこりしながら酒を注ぐ。「よろしく」と言ったか言わなかったかという程度で自席に戻ると、あとは何も言



沢村秀雄村長と

わない。別の人は、快活に話す。村教育長のT氏について、「あの方は、大学でも、職場でも先輩です。」と何気なく話したら、「たとえ先輩でも、職についたら別じゃないですか。」との話。相手は、どう見たろうか。とにかく酒は飲めそうだったろうか。「その人」とはS村長であり、「別の人」とは、S村議会議長である。

◆ 3 満票の辞

「開票の結果を申し上げます。賛成 21、反対 0」隣の議場の声が伝わってくる。目の前で一生懸命話をしているK課長補佐の声は、ほとんど耳に入らない。昨年2回も否決された助役人事案件が、ようやく可決成立した一瞬である。議場に招かれ、議長から「ご挨拶をお願いします。」記憶済

の挨拶が口をついて出る。「助役に選任同意いただき、大変光栄に思いますとともに、その重責に身の引き締まる思いであります。伺いますところ、本村におきましては急激な人口増加等に伴って、教育施設の問題、道路の問題、生活環境整備の問題等課題が山積しているとのことであります。はなはだ非力ではありますが、村長を補佐し、議員の皆様のご指導をいただきながら、誠心誠意村の発展に尽力したいと思っておりますので、宜しくお願い申し上げます。」

♣ 4 村民へのお披露目

「いやー、あの後急いで追い掛けたんですが。もう役場を出られた後で、こうして県庁までついてきたんですよ。」地元の I 新聞の記者が目の前で汗を拭いている。別室に案内して質問を受ける。「助役に選任された感想は」、「滝沢村をどう見えていますか」、



地元紙(岩手日報平成4年3月26日付)の記事

「助役としてどう取り組むか」、「趣味は」、「自己診断してください。」ほとんどヤマをかけていたとおりの質問である。十日後、これが I 紙の人の欄に写真入りで掲載される。村民に対する実質的なお披露目である。

♡ 5 滝沢住民になる

「家から通える所だから良かったじゃないか。」「いや住所は移します。」というやりとりのあと少数の人は、「そうかもしれないな」と頷く。しかし、残り大半は「どうして?あんなに近いのに」と言う。「夜の部も多いようだし、いちいち帰るのも大変だと思うから」などと答えておく。

県幹部からの内示の際も、特段の指示はなかった。しかし自治体のナンバー2が他市町村の住人であるという図は、自分の辞書にはなかった。従ってこのことは、妻にも相談しないで即決した。助役人事をはかった議員

全員協議会で、ある議員は、住所を移転して滝沢住民になるという意向を評価する発言をしたという。

愛する市町村行政に飛び込めるぞ、と思った私の気負いでもあった。

♠ 6 初出勤

4月1日午前8時30分、昨夜から特別に泊まっていた妻に見送られて助役公舎(マンション)を出る。晴れ。主要地方道盛岡環状線の歩道を広大な田地にみとれながら歩く。5分もしないうちに4階建の赤茶けた役場に着。窓際に沢山の職員が寄って、こちらを見ている。I総務課長の笑顔の出迎えに役場への一步を記す。予定の時間に村長室のドアを開ける。S村長はズボンをはきながら、「すみません。少し待ってください。」何となくホッとする。暫くして、収入役、教育長の侍立の中、村長から「助役に選任する」という辞令を受ける。読み上げる村長の低い声が印象的。

すぐ場所を移して職員辞令交付式に臨む。村長に紹介されて挨拶。「これまで市町村職員として仕事をしたことも、滝沢村に住んだこともありませんが、村長のご指導の下、職員の皆様のご支援、ご協力をいただきながら、微力を尽くしたいと思いますので、宜しくお願い申し上げます。」

◆ 7 助役室

助役室は、廊下を挟んで村長室の向かい側にある個室である。もと会議室を改装した室で、絨毯の上に机、椅子のほか応接セット、木製のロッカー、書架、観



助役室

葉植物、テレビが置かれ、エアコンもあり、更に大きな絵まで飾られてある。来室したある県職員が、冗談交じりに県の副知事室より立派だと言ったほどである。窓からは、里の山々の奥に大好きな岩手山(2,039m)が望める。今後の我が公務員生活でこれほどの待遇を受けることは、もはやある

まいとさえ思う。ただ、当初は、初めての個室勤務に何となく落ち着かず、たまに入室者があったり、電話が来たりすると、ホットしたものである。

♣ 8 庁議

庁議は、村長、助役、収入役、教育長の特別職四役と各課長、各出先機関の長によって構成される。4月までは、月1回であったが、5月からは毎週1回(月曜日)となった。総務課長の司会のもと、村長挨拶、他の三役挨拶、審議事項、主要行事予定と続く。当初の月1回・月間行事予定方式から、週1回・週間行事予定方式に変わり、庁内の意思疎通が密接となり、引き締まったような気がする。



♡ 9 エーデルワイスの歌

助役の大きな仕事の一つは、村長の代理で各種会合に出席することである。5月のある 乾杯の音頭(文中とは別場面)日、シルバー交通安全モデル地区総会に出席して挨拶を述べた。会議が終わったところで幹事から、懇親会の案内があり、助役も是非出てほしいとのこと。これもよくあること。また挨拶を求められ、やがて乾杯となる。この会合の特徴は、全村からの参会でなく、一地域からの参会ということである。つまり、皆顔なじみであり、地域の仲間である。やがて誰かがいつもの歌を歌い出した。次に別の人が歌い出す。このままいくと御指名間近である。カラオケなら何とかなるが…と酔った頭で必死に考える。あった、あった、学生時代に覚えた横文字の歌である。メロディは、まずまずであるが、歌詞がおぼつかない。幾度か反芻してみる。そのうち、皆の視線がこちらに集まってくる。指名までされたか覚えていない。それではとエーデルワイスを歌い出す。ハードルを一つずつ越えるような気持ちで歌詞をさがし、歌い継ぐ。やっと終わって、ふうーという感じである。酔客もほとんど飲んでいない主婦連も喜んで(?)拍手。これでめでたく退出と

なる。

♠ 10 初答弁

役所の財力と権限は強力である。膨大な予算を消化し、許可認可権を行使する。しかし、これは、執行部当局の考えだけでできるものではない。予算を始め、条例制定など大事なことは、議会の承認を得なければならないことになっている。このほか、議会は質問という形で当局の姿勢を糺し、必要に応じて追及もする。特に、年4回の定例会における一般質問は、その最高の舞台とも言える。議員は、入念に準備し、高邁かつ鋭い質問を浴びせ、男を上げる。対する当局も、その答弁には十二分の注意と多大の労力を費やし、万全を期する。このため、できるだけ早目に質問原稿を手に入れ、関係課に答弁内容を準備させる。その後村長以下三役が入って、答弁内容を吟味し、仕上げる。

平成4年6月2日は、6月定例会の初日である。K議員の質問に対して、かねての打合せのとおり、私が答弁する。

質問者の降壇を待って、「議長」と手を上げる。議長が、「相原助役」と指名する。自席で起立して一礼した後、壇上に向かう。途中、議長席に一礼し、壇上に到着すると、そこでも一礼。第一回目は、答弁の内容よりも、そんな手順の方が気になり、いやがうえにも緊張を高める。何とか原稿を読み終え、先程と逆の手順で自席に戻る。汗がにじむ。

答弁に対しては、再質問と再々質問がある。こちらの方は、自席で起立して答弁する。あらかじめ承知できる質問ではないので、出たとこ勝負である。ただ、助役の場合は、細かい事実関係や数字等は、課長答弁に任せ、政策的、方針的な話を述べれば良いので、かえって楽な面もある。質問された事項についての基本認識や施策の方向さえわかれば、それらしい答弁



地元紙(岩手日報平成4年6月6日付)の記事

はできるのである。

後に地元紙に「堂々たる答弁」と過大な表現で掲載されもしたが、冷汗一斗の初答弁であった。

しかし、難局を自分で乗り切ったという満足感は、また格別であった。

◆ 11 チャグチャグ馬コ

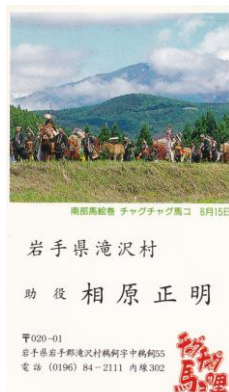
ヒヒーン、シャグシャグ、ガラガラ、パンパン。
今日は、6月15日。ここは、滝沢村役場から北西に約1.5キロメートルの位置にある蒼前神社(馬の守り神さまで、駒形神社とも呼ばれる。)の社殿内である。「ヒヒーン」、「シャグシャグ」というのは、色とりどりの装束をつけた農耕馬のいななきと馬に付けられた大小の鈴の音であり、「ガラガラ」、「パンパン」は、その馬の引き手が神社の鈴を鳴らし、柏手を打つ音である。

私は、形ばかりのお神酒を頂きながら、次々と注連縄の向こうに現れる人馬一体の参拝に目を細める。

午前9時頃になると、神社境内の木立の間に百頭ほどの馬と馬に乗る子供や娘、引き手の男達でごった返す。9時半、いよいよ行進の開始である。役員馬12頭(盛岡市長、滝沢村長ほか)を先頭に百頭余の馬がゆっくりと進んでゆく。ここから盛岡市の八幡宮まで15キロの道のりを4時間余かけて進むのである。

広域(盛岡市、矢巾町、滝沢村)の行事ということもあって、助役の役割は、特にない。しかし、担当課に頼んで行進に参加させてもらう。地下足袋、股引、半天、菅笠を身に付けると、馬子にも衣装である。

行進に参加するといっても、手綱を取る訳でもないの、見物人が気にならなくなると、歩速を調節して、何人もの引き手と話しをしながら歩く。「チャグチャグ馬コの良さは、人馬一体の連帯感にある。馬上の子供や娘



チャグチャグ馬コを
デザインした名刺

は我が身内。馬の周りの男達が、その安全のために神経を張り詰めている。」「マンホールに前の馬の尿が掛かったりすると、次の馬の蹄が滑って転ぶ危険もある。そのため、マンホールに人が立っている。」など感心しながら聞く。

やがて盛岡駅付近に差し掛かる。人垣が津波のように膨れ上がっている。観光客動員数 50 万人(主催者発表)もあながち誇張ではあるまい。終着の八幡宮で記念撮影。遂に勤めを果たしたとの思いであった。

♣ 12 初めての敬礼

ふくとお一かん(副統監)にたいしー、けいれいー(敬礼)、かしらー(頭)なかつー(中)。何十人も整列した消防団員の統



率者から大きな声が発せられる。全ての 敬礼への答礼(文中とは別場面)団員が踵を揃え、壇上の私に向かってサッと手を上げ敬礼する。それを見て私は、右手を目の高さまで上げて答礼する。敬礼の形のまま団員の列の向かって左側から右側の方に視線を移し、右側から中央に戻ったところで右手を下ろす。すると消防団員全員が同様に手を下ろす。私が降壇の姿勢に入る。せいれつー(整列)やすめつー(休め)。統率者の声で団員は踵を開き、手を後に組む。

今日は、村消防訓練競技会。各分団(計 10 分団)が自動車ポンプ操法などを競い、郡大会の出場チームを決めるのである。統監(村長)挨拶など一通り終わった後で、この場面となったものである。

二、三日前の助役室。消防防災係の K 君が、盛岡西消防署滝沢分署の職員を伴ってやってきた。真新しい制服を着せられ、副統監章を右胸に付ける。制帽を被ったところで分署職員から敬礼の仕方を教わる。踵の位置、背筋、左手の指先、帽子のつばの角度など細かい注意を聞く。

当日の朝は、公舎でも練習した。緊張でうまくいったかも覚えていないが、とにかく終了し、ヤレヤレといった感じである。

その後、このような行事のあったときに、敬礼の形を忘れかけ、K 君を捕まえて尋ねたところ、忙しそうにしながら、「偉い人の敬礼は、どうでもいいです。」と言われてしまう。その後は、気楽に敬礼。

♥ 13 助役さん、側溝の蓋を掛けてください。

その日はボーナスの支給日であった。
村では給与の口座振込制が行われておらず、原則本人への手渡しである。県で給与の口座振込制が採用されて以来、給与の実感がなくなったことと亭主の権威を示す場が喪失したことを残念に思っていた私は、古き良き時代に舞い戻った気持ちになったものである。午後 5 時半ごろボーナスの入った胸ポケットを気にしながら、歩いてマンションへ。



マンション 7 階の自室から
ニュータウン方向を撮影

そのマンションの 1 階でエレベーターを待っていた時である。「助役さんですか。」と誰かが声を掛けてきた。見ると幼い子供を連れた若い女性である。「はい、そうです。」と私。お互い全くといっていいほど行き来しない都会風マンションであり、単身赴任の若い人達が多い。私を助役と知っている若い人があるのが不思議なほどである。ヤングは単刀直入に用件を切り出す。「マンションの北側の道路の側溝に蓋のない部分が有るんです。子供がよくそこをのぞいたりして危ないんです。早く何とかしてもらいたいんですが。」

私は大いに戸惑った。住民からこんな身近な注文を受けること自体が初めてであったし、どこが管理し、どこに責任のあることなのかがすぐに思い浮かばない。疲れてやっと帰ってきたという気分もある。ついお役所風の言葉が出てしまった。「役場の担当課に電話してみましたか。」「まだですが、それはどこですか。」「建設課だと思います。私も心掛けておきます。」その若い母親は、「よろしくお願いします。」と言って去っていった。

次の朝、出勤前に現場を見ると、なるほど話のとおり危険な状態である。出勤後、建設課長に事情を話す。我田引水的な話でもあり、予算のことも心配なので、恐る恐るの調子であったが、S 課長は、いとも軽く「わかりました。調べてすぐ手配します。」とのこと。何とその日の内に蓋がついてしまったのである。あとで感謝しながら聞くと、こういう注文や苦情はあらかじめ予想されており、そのための予算措置がなされているとのこと。

その後、あの若い母親から特にお礼を言われたこともなかったが、件の側溝蓋を見る度に、自分も本当に村役場の人間になったんだなあと思ったものである。

♠ 14 書類決済

「あの～すみませんが、〇〇の設計委託契約の起案文書を持ち回るつもりが、上の方へ回ってしまっ…」
学務課のH係長がYシャツを腕まくり



マンションの裏手から公用車で
出立(S 運転手さんと)

した姿で目の前に立っている。私の机には、すでに決済した書類(回覧も含む。)が50件ほど積み上げられており、未決済分がなお30件ほど残っている。

「さあ記憶がない。あ、いや、印象がないなあ。探してみて。」と私。H係長が探し始めてほどなく、なんと、決済分の山から見つけ出す。「ありました。」

「あ、見てたのか。印象が薄かったなあ。」ときまり悪くなりながら弁解する私。H係長も返答の言葉は見つからず、「失礼しました。」とその書類を抱えて立ち去る。

ここで多少言い訳気味に説明すると、毎日書類は、午前(朝)に50件近く、日中に更に同じくらい回ってくる。年次休暇の承認願い、出張の伺い、出張復命、行事出席依頼などは短時間で目を通す。調定伺い(収入金の確認)、入札伺い、契約伺い、支出伺い、許認可伺いなどは、根拠資料を見

ながら時間をかける。官庁速報、自治日報などの回覧ものは後回しにして最後にじっくり読む。(但し、時間があれば)

50 件あれば、たっぷり 1 時間はかかる。実際には、この間に来客、部下の報告、会議、電話などが入り、立ったままの決済という事態にもなる。(立っても座っても同じようなものだが、気忙しいと、つい立ち上がる。)



2～3 日の出張の後などは、机の上の決 滝沢駅開業セレモニーで祝辞(平成 5 年 12 月一文とは無関係) 済箱に書類の山が築かれるほか、更に、ダンボール箱に書類の詰まったものが 2～3 個という状況になる。

この書類の山は、無言ではない。「早く決済して! でないと仕事が進まないよ!」としきりに叫ぶ。じっくり検討したいことを後回しにして、せつせと山崩しにいそむ。

こんな状態だから、1 件 1 件の書類を見ているときは、わかったつもりでも、山が動いた(未決→決済)後は、印象の薄い案件は思い出せないことにもなる。

H 係長は、図らずもこのことを認識させてくれた。

ところで、滝沢村では、すべての書類を 1 件ごとに紙ばさみに挟んでいる。このため、書類の山は、実際の倍以上も高くなる。また、持ち運ぶ職員(村長室や助役室へ)の力もそれだけ必要になる。

このため、着任早々に総務課の職員に「紙ばさみの必要のない書類もあるのではないか」と指摘し、一時そうなったものもあったが、すぐ、元に戻ってしまった。また、私の方も 1 年も経つと、慣れてしまって、あまり感じなくなってしまった。

県に戻ると、違うやり方(紙ばさみを使う例は、多くない。)に接して、滝沢村時代を懐かしく思い出すに違いない。※当時の回想

◆ 15 地権者交渉

「助役さん、何とかお力添えをお願いします。ここで出ていただくのが一番良いと思います。」目の前でS課長が、しきりと頭を下げる。いよいよ出番が来たかと気負い込む。これまで用地交渉の経験はない。しかし、損害賠償交渉の経験はある。何とか見当はつきそうだ。入念に打合せをする。

「役割分担をした方がいい。担当者は、原則を踏んで厳し目の話しをする。私は、抽象的な表現で妥協を図る。」と提案。

当日の夕刻、役場の車に分乗して相手方の家に向かう。既に聞いていたとおりの家の構えの玄関に立つと、奥さんが顔を出す。居間に通されると主人が待っていて、座布団を勧められる。かねて用意の菓子折りを差し出しながら挨拶。部屋の中にあるオモチャを見つけて、ひとしきり、お孫さんの話しをする。

しばし沈黙の後、主人が、「今日は責任者が来たからには、こちらの言い分を聞いてもらえるでしょうね。」と切り出す。担当者が、「買収単価は、近傍類地のものを参考にしたものであり、これを基によく話し合いたい。買収予定地と隣接地の境界争いは、こちらでは関与しかねる。」と応ずる。「それでは、この交渉には応じられませんね。その程度のことは、やってくれてもいいのではないか。」と主人。

同じような話しが何回か繰り返された後、そろそろ私の出番である。「わかりました。直接村の用地取得とは関係ない話しと思いますが、先祖伝来の大事な土地を割いて頂くことでもあり、何とか努力してみましよう。」我が意を得たりと主人。「買収価格については、判った気がするので、ひとつそちらの方を何とかお願いしたい。」

その日は、これで退出し、その後境界争いの相手方との間を何回か往復し、とうとう話しをまとめることが出来たのである。無論、用地買収も成



主任児童委員辞令交付式
(村長室で一文中和は無関係)

功である。これだけの苦勞をしてみると、その後その土地があった部分の道路を通るたびに、爽快な気分になったものである。

🍀 16 農家訪問

滝沢村の基幹産業は、農業である。平成2年の農業就業人口は、全就業者の13.8%であり、純生産額に占める割合は5.9%に過ぎないとはいえ、もともと農業によって立ってきた村なのである。このため、計画書でも議会答弁でも、「基幹産業」という言葉が常に添えられる。

私は、実家が兼業農家ではあるが、農業行政の経験が少ない。そこで、農林課にまず、現場を見て勉強したい旨申し入れていたのであるが、今日は、その願いがかなって、農家訪問が実現した。

一日の行程の中で、野菜農家、畜産農家、花き農家と回る。花き農家を訪問した時のことを記そう。この農家では、村から小菊の栽培委託を受けて数十種類の栽培を行っている。一畝ごとに高さや色の異なった小菊が並んでいる。栽培のし易さとあわせて時期に応じた市場の受けの良さも実証してゆくものである。



家族で村内の鞍掛山(897.1m)
山頂に立つ(文中とは無関係)

県の農業改良普及員のTさん、村農林課長のOさん、村農協の営農担当のHさんは、この実証栽培を指導し続けてきた人達であるが、今日も3人揃って、栽培農家のSさんと細かく意見交換している。花の栽培は、村全体でも生産量が急速に伸びており、関係者は大いに期待している。

実証圃の後は、Sさんのハウスに移り、ストックという花の栽培について説明をいただく。美しく咲き競う花に見とれながら、「花の栽培は、労力的にきつくもなく、花束を抱き上げたときなどは、何とも言えず楽しいものですよ。」と言うSさんの笑顔と話に何となく納得する。若い女性を引きつけて、農業青年の結婚促進にも役立てばよいがとの思いがよぎる。

最後は、ストックを 1 束いただくおまけまでついた楽しい視察であった。

♥ 17 開票管理者

平成 4 年 7 月に参議院議員通常選挙があり、私は、村の選挙管理委員会から開票管理者に選任された。開票管理者とは、開票事務の最高責任者であり、投票の有効、無効を決定したり、開票事務が公正迅速に処理されているかどうか、会場内の秩序が十分保たれているかどうかなどを監視監督する役どころである。



開票管理者として

夕刻、滝沢村総合公園体育館内にしつらえられた開票会場の準備が整い、開票事務従事者(村職員)が所定の位置に付いた頃、開票管理者として訓示する。各地の投票所から投票箱が到着し始めると、場内に一気に緊張が走る。その頃には、各候補者から届け出のあった開票立会人数人が私の隣の席に着席している。開票宣言の後、これらの立会人とともに、投票箱の封印状況などを確認し、投票箱を開かせ、それが空になったことを確かめる。開票台の上に積まれた投票は、投票の秘密保持のためどの投票がどの投票区のものかわからなくなるようにかき混ぜてしまう。2 階席には、参観人も多数詰めかけ場内は、異様な熱気に包まれる。

やがて開票係から、有効投票の束が候補者ごとに回ってくる。まず、立会人が点検し、確認印を押す。最後に開票管理者が確認印を押して、計算係に届けさせる。印の朱肉で指のあちらこちらが赤く染まってくる。時々立会人から疑問に思ったことを聞かれるものの、この段階では即答できる軽い内容のものである。微妙な疑問表の処理となると立会人がなかなか引き下がらず、開票管理者を囲んで“激論”という事態にもなる。ここは決して無理してはいけない。時間を気にしながらもじっくり説明して気持ち良く納得してもらおう。こういう場面では、候補者が厳しく競っている時が、

どうしてもシビアになりがちだという。

さしたる波乱もなく、やがて候補者ごとの得票数がすべて確定。担当職員が手際よく作成した関係書類にハンコを押して、すべて終了したのが、夜の 10 時過ぎであった。

♠ 18 モーニング

8 月に入って間もなくのこと、やや太り気味の F 福祉課長が、汗を拭き拭きという感じで助役室に入ってきた。8 月 20 日に村の戦没者慰霊祭があるので、その



段取り等の説明にきたものである。説明が終わる頃、なにやらモジモジと言いに
モーニング着用し、村勢功労者表彰式で開式の辞を述べる
くそうにし始めた。「あのなっす、村長になっす、助役さんはモーニングを持っているかなあ、と言ってるんですがね。」と F 課長。「仲人をしたこともないから持ってないんですよ。女房に話して早速用意しましょう。」と私。

次の日曜日、妻と盛岡市内のデパートへ。いかにも“高そうな”売り場でモーニングを新調する。ついでにタキシードとの違いも聞くが、なかなか頭に残らない。

戦没者慰霊祭の当日は、生まれて初めてこのモーニングを着て式に臨み、開式の辞を述べたが、気のせいかもしれないが、いつもより緊張。村の行事では、このほか村勢功労者表彰式(11 月)と成人式(1 月)に着用したが、2 年め以降どの行事で着用するものであったか忘れそうになり、その都度確認したものである。

◆ 19 案山子(かかし)

秋晴れのよき日、今日は、村総合運動公園で JA 滝沢大運動会である。

主催者である農協組合長の挨拶の後村長祝辞となる。参加者はそう多くはないが、農家の家族が寄り添い、各地区ごとにリラックスして並んでいる。今日は思いっきり楽しむぞというぞという雰囲気が感じられる。しかし、誰にもまして表情豊かに場の雰囲気を盛り上げているのは、応援席に高々と両手を広げて陣取る案山子連なのである。参加者には悪いが、壇上からの祝辞は何となく笑顔も素晴らしい案山子君達に向かってする気持ちである。私は祝辞後間もなく引き上げたが、帰る途中ひそかに趣味とする下手な俳句を一句ひねったものである。

あいさつを 案山子が笑って 聞いており

初代奥州市長(2年目)心象スケッチ

平成 19 年 4 月 19 日

— 偕老同穴(かいろうどうけつ)異聞

(第 48 号) —



4 月 16 日は、私たち夫婦の 30 回目の結婚記念日であった。真珠婚に当たる。ほんの限られた時間しか取れないが、二人でゆっくり過ごすことにした。

偕老洞穴(かいろうどうけつ)に関する記事

そのゆっくりした時間に、ふと地元紙の記事が目にとまった。

はじめて見る偕老洞穴(かいろうどうけつ)の写真である。

不覚にも偕老同穴が、太平洋などの深い海底に立っている海綿動物の一種を指すことを知らなかった。

中が空洞で、何故か雌雄一対のエビが住む。このエビの名をドウケツエビと呼ぶ。

発見当初は、このエビに「偕老同穴」の名がつけられ、後に海綿の名に